



# CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動紹介	2~3
公開講座紹介	4~5
活動紹介	6~8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター  
 静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533  
 ●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

## A r t & C u l t u r e



大学院デザイン研究科長  
**宮田 圭介**  
 Keisuke Miyata

### ロボットの知性

最近、大手通信企業から「感情を持った家庭用ロボット」が発表された。人間の感情をコンピュータ（人工知能）が理解して、人間とコミュニケーションができるロボットである。ゲームの世界でも、将棋において人工知能が現役プロ棋士を破るレベルに達している。ロボットの頭脳（人工知能）は進歩して、人間と同じレベルの知能・知性に到達するのだろうか。

チェスや将棋などルールがはっきりして理詰めで解けるゲームの場合、あらゆる手をしらみつぶしで高速計算できれば人間に勝てることは以前から予想されていた。しかし、人間とのコミュニケーションは、ファーストフードでの接客のようなマニュアル化できる範囲ならば既に試行されているが、それ以上のコミュニケーションになると難しくなることは想像がつく。私たちは五感を駆使して相手の気持ちや考えを推測しているが、発表された家庭用ロボットも、各種センサーを用いて人間の気持ちを読み取ろうとしている。

例えば、このロボットの眼は、カメラと画像処理技術を用いて人間の表情を読み取っている。デジタルカメラで笑顔を検出するとシャッターをきる「スマイルシャッター」のような表情分析技術が用いられている。ロボットの耳は、話し言葉をテキスト化して、喜怒哀楽に関係する単語から人間の感情を分析している。同時に、話す声色から感情の分析もおこなっている。最近のスマートフォンでは、話しかけるといろいろな操作を行う機能があるが、その音声認識技術が利用されている。そして、これらの分析をもとに、ロボットは身振りや音声で最適と思われるリアクションをとってくれる。

従来のロボットとの大きな違いは、個々のロボットのリアクションに対する人間の反応がクラウド（サーバー）に蓄積されて、そのリアクション能力（コミュニケーション能力）が改善できる仕組みになっている点にある。今まで個々のロボットが個別に経験学習していたが、今後は多数のロボットの経験デー

タが共有できるため、人間とのコミュニケーション能力が飛躍的に向上することが期待される。それでは、これらのロボットがサーバーに経験を蓄積・共有することにより、人間レベルのコミュニケーション能力を有するようになるのだろうか。

このような問題提起を行った理由は、私が行っている発達障害者の支援研究と、ロボットの人工知能の開発研究が類似しているからである。発達障害とは、自閉症やアスペルガー症候群など近年知られるようになった障害であるが、臨機応変な対人関係が苦手や他人の気持ちや意図を汲むことが難しい症状がある。そこで、他者の気持ちをイラストや動画で可視化して、気持ちの理解を促すビジュアルデザインの研究を行っている。他者との円滑なコミュニケーションを実現する目標は、家庭用ロボットの目標と同じである。

ただ、前職において、ロボットの仲間である建設機械の自動化研究を行ってきた経験から、ロボットが人間と同等の知性を有することは非常に難しいと感じている。例えば、発達障害者に対して「臨機応変の対応」を教えることは極めて難しいが、建設機械でも同じである。例えば、「どの程度にわか雨が降ると運転を中断するのか」という臨機応変の判断を建設機械のコンピュータに教えることは難しい。ルールが無く、常に状況が変わる世界において、私たちは当たり前のように行動しているが、発達障害者やロボットにとっては極めて難しいことなのである。東北大学の渡部信一教授は、「ロボット開発と障害児教育に共通点がある、根本には「人間」がある」という視点で研究を進められているが、私も同感である。「人間」を理解できなければ障害者を支援することは難しいし、ロボットの知的レベルを上げることも困難である。

ロボットに付与できる知性とは、人間が教えられることに限定されている。例えば、未来のロボットは、人間を見て「一目惚れ」する気持ちが起きるだろうか。瞬間的に意志を伝えるために、人間と「アイコンタクト」ができるだろうか。ロボットが「自己表現」として作品制作を行うだろうか。芸術作品を鑑賞して「感動」するだろうか。私たちがそのような知性を解明してロボットに教示できなければ、人間と同等の知性を有するロボットの実現は難しいだろう。人間の知性に関する理解の限界が、ロボットの知性の到達限界になってくると思われる。従って、鉄人28号やガンダムなど人間が操るロボットは実用化に近づきつつあるが、鉄腕アトムやドラえもんなど人間並みの知性を有するロボットの実現には時間を要するであろう。しかし、人間の知能・知性を有するロボット（人工知能）の探究は、人間の知性の解明につながっており、その研究成果は今後の文化と芸術の発展に寄与していくものと期待している。

# 「クオーレ・ド・オペラ」プロジェクト公演 『ラ・ボエーム』 ～新しい形式のオペラ上演の試み

高田和文 (副学長 文化・芸術研究センター長)



静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターでは、前年の『カヴァレリア・ルスティカーナ』(ピエトロ・マスカーニ作曲)に続いて、2014年9月4日、本学講堂において『ラ・ボエーム』(ジャコモ・プッチーニ作曲)を上演しました。

このプロジェクトは、2013年に「日本におけるイタリア」の行事の1つとしてスタートしたものです。プロジェクトの発端は、オペラ歌手の藪西正道氏及び西野薫氏とミラノ在住の演出家井田邦明氏の出会いでした。井田氏と私とは長年の親交があり、これまでも私が翻訳したダリオ・フォー作品の上演など、様々な演劇プロジェクトを共同で実施してきました。そこで、井田氏が私に声を掛け、東京・イタリア文化会館館長の

ジョルジョ・アミトラノ氏に話をつなぎました。アミトラノ氏は学生時代からの私の友人で、よしもとばななや村上春樹作品のイタリア語への翻訳者として知られています。彼は即座に文化会館のアニェッリ・ホールの使用を快諾し、東京公演の話がまとまりました。そして、公演の規模からして本学講堂でも十分上演可能と判断し、浜松での公演を大学のイベント事業として実施することとしました。

このように、人と人のつながりから生まれたプロジェクトでしたが、単に互いに共感し、意気投合したというだけでなく、私たちの中には共通する思いがありました。藪西、西野の両氏は、自らオペラ歌手として活動するだけでなく、次代の日本のオペラ界を担う後進の指導にも当たっています。井田氏は藤原歌劇団や二期会での演出経験がありましたが、同時にヨーロッパ各地でいくつものオペラ演出を手掛け、日本とヨーロッパのオペラに対する認識の違いを痛感していました。一方、私は本来演劇を専門としていることから、オペラの演劇性に強い関心を持ち、同時に豪華な来日公演を至上とする日本のオペラ上演のあり方に疑問を抱いていました。

このような私たちの問題意識がぴったりと重なったのが、「クオーレ・ド・オペラ」というプロジェクトでした。つまり、高価

な舞台装置や衣裳を使わずに、歌手の歌と演技だけでオペラの中にあるドラマ性を最大限に引き出す——これがプロジェクトの基本的なコンセプトです。同時に合唱と楽器編成を最小限に切り詰め、それに適した編曲を行なうことにしました。その代り、当然ながら歌手たちには大きな負担を強いることになりました。単に歌う、あるいは歌いながら動くだけではなく、台詞劇と同様のきめ細かな演技が求められたからです。2か月間に及び稽古期間は、オペラとしては異例と言ってもよいものですが、演劇の稽古としてはごく普通です。つまり、井田氏はオペラの歌手たちに台詞劇と同様の緻密な演技を求めたわけでした。

そうした井田氏の狙いは、『カヴァレリア・ルスティカーナ』と『ラ・ボエーム』という作品の選択にも反映されています。どちらも、いわゆる「ヴェリズモ・オペラ」の流れを汲む作品です。つまり、音楽劇という制約の中でリアリズムを徹底的に追求し、迫真性に富む作品だからこそ、演劇性を引き出そうとする演出が効果を発揮するのです。

『ラ・ボエーム』の物語は、パリの下町で貧しい生活を送る2組の恋人たちを中心に展開します。お針子のミミと詩人口ドルフォの出会いと別れ、そしてミミの死。再び結ばれながら喧嘩別れしてしまう画家マルチェッロとその恋人ムゼッタ。若いボヘミアンたちのせつない物語が、プッチーニの流麗な旋律とともに繰り広げられます。

井田氏の演出は、登場人物の心理、感情表現、動作の1つ1つをていねいに積み上げていくものです。実際、何度か稽古に立ち会いましたが、その進め方は台詞劇の稽古と何ら変わるところがありませんでした。徹底的にダメ出しをし、ひとりひとりの歌手に納得のゆくまで考えさせる。歌うことを優先するのではなく、内から湧き上がる感情を演技に結び付けるという方法です。

井田氏の演出はまた、主軸となる恋愛ドラマと同時に、この作品のそこかしこに散りばめられた喜劇的場面をしっかりと見せる工夫をしています。4人の若き芸術家たちの滑稽なやり取りや彼らが家主を言いくるめるところ、カフェで貴族の老人に勘定書きを押し付けるところなど、普通の上演ではさらりと受け流してしまうような場面が、確実に喜劇的効果を生み出しています。それはとりもなおさず、イタリア伝統のコンメディア・デッラルテ(仮面即興劇)の喜劇性を踏まえた演出にほかなりません。喜劇的な場面で笑いが生まれるからこそ、結末の悲劇性がいっそう強く観客の胸に迫ってくる。それこそまさに、プッチーニの意図したところでしょう。

もう1つの井田氏独自の視点は、若者たちの貧困に着目したことです。彼らはやや大げさに言えば経済的弱者であり、社会の主流から排除された存在です。井田氏はそうした若者たちの鬱屈した不満や疎外感を強調しましたが、それは現代日本の若者たちが置かれた状況にも通じるものです。

単なる恋愛悲劇に止まらない、さまざまな要素が盛り込まれた重層的なドラマ——井田氏の演出は、『ラ・ボエーム』のそうした魅力を改めて引き出したと言えます。今回の公演は、日本経済新聞の音楽レビュー欄においても高く評価されました。

## 活動紹介

## 東京デザイナーズウィーク ASIA AWARD 学校作品展

中山定雄 (空間造形学科)

今年で30年目を迎える東京デザイナーズウィーク (TDW) の学校作品展にSUACは5年連続で参加している。私はプロ作品展でさらに10年前から参加しているが、最初にお小遣いを叩いて仕事の合間を縫って作品を制作し、いちばん小さなブースに参加した時のことをこのエッセイを書きながら思い出した。

当時は現在の10万人が訪れる日本最大のイベントという感じではなかった。まだ訪れたことがなかったので、想像でミラノ国際見本市(サローネ)はこんな感じの何倍も大きいのかなあとか、いつかは海外で出展したいなあと夢をみている。普段は会社勤務のインハウスデザイナーの自分の実力を知りたかった。デザイナーの仲間や有名な先生と知り合いたかった、一般のお客の声を直接聞きたかった、要するに他流試合をしたかったのだ。会期中、私は仕事以外の週末や夜は作品の横に立ち、たくさんの人に自分の作品や考えていることを感じてもらおうと必死に声をからした。その時感じたことが仕事のモチベーションにつながり、反省し、仲間が増えて、また来年次回こそ満足のいく作品を展示したいという気持ちになっていた。しかし小遣いでは限界があって、勤務外の時間は限られるので、やりたいことの半分もできないが、毎年ここだけは頑張ったので見てくださいという感じであった。もちろん受賞は一切なし、メディアにもほとんど取り上げられなかったが、自分なりに自分は負けない、なかなかやるなあと自画自賛したものであった。

話がそれだが、学校作品部門は震災で減った年もあったが、年々参加校が増え続けていて、世界中の50校が300作品以上出展する。世界の学校作品展では最大級の規模である。2年前からはアジアアワードと呼ばれるようになった。いずれはTDW自体も名前がアジアデザイナーズウィークと変わりそうな勢いである。そこでSUACのプレゼンスを上げるべく使命に燃えて参加をしているのであるが、東京でのSUACの知名度は想像以上に低く驚いている(現在も)。特に学校作品ゾーンは美大芸大を目指す高校生が品定めにやってくるがあるが、ほとんどの学生が素通りをしそうになる。彼らのお目当てはアルファベット順で必ず隣になる多摩美術大学ブースらで、そこは大盛況、入場に行列ができていたりしている。どうやら朝の情報番組などでTDWが取り上げられて、多摩美が紹介されているらしいのだ。

SUACチームは毎年、各学科学年で公募をおこない約30人が夏休みを費やして試行錯誤や議論を繰り返して準備する。脱落する者やメンバー以外の仲間が手伝いをするなど、かなり本気の青春時代を過ごすのである。彼らは自信を持って東京に作品を持ち込み、約10日間の会期に常時数人ずつ交替で作品や大学の案内、市民を巻き込んだワークショップ、公開プレゼンテーション大会などをおこなう。昨年はデザイン学科再編直前であるため、最後の3学科別々の小さな3ブースによる展示を展開した。指導教員も今年は多く各学科と実習指導員で計10名を超えた。その前の年までは逆に学科再編を盛り上げるために3学科合同ブースで大きく展開し会場では目立っていた。それが昨年は小さい離れ離れの3ブースであったためインパクトが弱く、会場の雰囲気になんか圧倒された。そこでさらに学生を

待ち受けるのは地方校への洗礼だ。とくに初参加のメンバーは最初、様子がわからないので緊張する。しかし最近、SUACは常連校の仲間入りができていて、他校の出展メンバー同士ですでに知り合いがいたり、他校の教員や主催者が親しみを持って接してくれたりしている様子だ。このようなムードが学生たちの緊張を解き、大胆にさせる。なんと学生は隣の多摩美ブースに並んでいる人を剥がしSUACブースに呼び込んだり、多摩美ブースの出口で待ち伏せてSUACブースに連れてきたり、目を見張る行動力を見せるのだ。地方校とは思えない堂々としたそれらの振る舞いは他の地方校の模範とさえ私は言われた。SUACブースへの来場者は1日約2千人、述べて2万人という集客でトップクラスである。

作品には毎年自信がある。それはSUACの学生たちが他校に負けないほど努力し、勝負という気持ちをもって取り組んでいることを他校の教員との情報交換で知っているからである。だからブースにさえ来てもらえれば必ず評価されると確信している。学校作品指導教員と主催者、出展企業、多くの著名デザイナー、大使館などが作品の採点をおこない、グランプリを決定する。昨年は空間造形学科チームが予選を勝ち抜き、英語による決勝プレゼンテーションをおこなった。作品制作に追われた彼らなのでこの英語は会期が始まってから、毎晩深夜にファミレスで考えたものである。なぜ文化政策学部の学生をチームに入れておかなかったのかと後悔した。

表彰式前夜は私も学生も眠れない。世界50校、300作品の中から決勝プレゼンテーションに進んだのは5チーム、5作品のみである。その他10作品ほどが入選するのであるが受賞は大変狭き門である。ここまで来られただけで大変な成果であるが、ベスト5に入ると欲が出てくるものだ。英語プレゼンテーションは何とか乗り切り、決勝の審査が行われた。審査の待ち時間中、私はSUACの学生の恐ろしさを思い知ったのだが、審査中にニヤニヤしているのだ。私が心臓が割れそうほど緊張しているときである。彼らは英語プレゼンテーションを乗りきったので完全にグランプリが受賞できると思っているのであろう。いざ表彰式、彼らは会場の一番前の真ん中を陣取った。私も気付かれないようにカメラの準備をした。グランプリは、多摩美術大学。準グランプリは静岡文化芸術大学空間造形学科。会場の大歓声を浴びたが、壇上にあがる彼らの足取りは重たい。少しの笑顔とまさかの涙である。

毎年ドラマがあるTDWであるが昨年は一番グランプリに近づけた。毎年さまざまなことが起きて、私たち指導教員は心が折れそうになるが、学生のあの涙を見たらグランプリを必ず取ると心に誓うのである。東京での他流試合でわかったことは、SUACは負けてない、なかなかやるなあということである。これは自画自賛ではない。以下に最近の受賞を記す。

- 2011年~2012年：作品部門準グランプリ、入賞2作品
- 2013年：学校賞部門入選、企業賞、作品賞部門準グランプリ、入賞1作品、入選1作品
- 2014年：学校賞部門準グランプリ、企業賞 作品賞部門入選2作品 プレゼンテーション大会1位



# 「創造都市 ボローニャの魅力を探る」を開講

平成26年度後期公開講座が2014年12月6日、20日の両日、開講されました。今回の公開講座は、2014年に本学がイタリア・ボローニャ大学と交流協定を締結したこと、同じく2014年の12月に浜松市が「ユネスコ創造都市ネットワーク」の音楽分野に加盟が認められ、既に同ネットワークに加盟しているボローニャ市と音楽交流に関する覚書を締結したこと、などを受け、長い歴史を誇るボローニャの芸術文化や特色ある産業のあり方、文化政策の現状などを紹介する講座として、本学教員5名が講義を行いました。

2014年12月6日(土)

## 1. 「ものづくり」都市 ボローニャの秘密／根本 敏行(文化政策学科)

エミリアローマニャ州の州都ボローニャは人口37万人、都市圏人口100万人を数えるイタリアの主要都市の一つ。イタリア半島の北部に位置し、国内の主要な鉄道や幹線道がクロスする交通の要衝でもある。

ボローニャは3つの別名を持つ。一つは「赤い街」、屋根瓦と煉瓦が赤いだけでなく、戦後長らく中道左派政権が続いたリベラルな都市、そういう意味でも「赤い」といわれる。二つめは「学問都市」、世界最古の大学といわれるボローニャ大学があり、市内には多くの学生が住む。三つ目は「肥満都市」あるいは「美食の街」、ボローニャ・ソーセージやスパゲッティのボローネーゼなどが有名で、食材が豊かな街でもある。

旧市内には数多くの歴史的資源が残る。特徴的なのは建物に付属する「ポルティコ」、これはいわゆる柱廊で、雨の日でも傘をささずに街中を回遊できる。またボローニャは市民一人当たりの文化消費支出がイタリアでトップ。市内には32の劇場、40の映画館、50の美術館・博物館、80以上の図書館、その他数多くの書店、古書店がある。

一方でボローニャは浜松と同じ「ものづくり」都市でもある。古くから繊維産業が発展し、機織関連の機械産業がやがてオートバイ、自動車産業に繋がった。このあたりの発展過程は浜松に似ているが、ボローニャの特徴は中小企業自体が国際競争力を持っている点である。中小企業が事業組合を作り、自社にない機能を事業組合の活動で補いながら、互いには「競争と協調」の関係にある。

ボローニャは歴史的な文化の集積と中小企業を中心とした産業集積が共存した都市である。R・フロリダは「創造都市」の要件として3つのT、すなわちtalent(才能)、technology(技術)、tolerance(寛容性)を挙げる。世界中から人が集まり、人種、宗教にとらわれない多文化共生が実現しているボローニャは、創造都市と呼ぶにふさわしい。

浜松とボローニャには類似点と相違点がある。首都と商都の間に位置する国内の立地条件やものづくり中心の産業構造などは似ているが、一方で文化的な蓄積や古い佇まいの街並みなどは大きく異なる。

浜松のものづくり産業は大企業が主導してきた。浜松が創造都市としてさらに発展するためには企業内にいる多数の創造的人材が活躍できる舞台、プラットフォームを作ることが必要で、その役割の一端を本学が担えればよいと考えている。

## 2. 絵本のまち ブックフェアとIBBY／林 左和子(文化政策学科)

毎年3月、ボローニャでは「チルドレンズ・ブック・フェア」が開催される。これは児童書、絵本の国際見本市で、世界中の出版社が本を持ち寄り、展示と商談が行われ、その場で翻訳契約が結ばれたりもする。

イタリアの児童文学作品といえば「ピノッキオ」や「クオレ」などが知られるが、数多くの名作を生んできた英国やアメリカ、カナダ、ドイツなどと比べれば、多くはない。またイタリアの出版の歴史の点では、フィレンツェやヴェネツィアが有名である。なぜイタリアの、それもボローニャで世界的な児童書の見本市が開催されるようになったのか。

「チルドレンズ・ブック・フェア」は1964年に始まった。初回の参加団体は44、海外からの参加が14団体あり、当初から相当数の海外出展者を招いていた。文学的に優れた児童書、視覚的に優れた作品が数多く出品された。翌1965年は104カ国、128団体に増加、日本も初めて参加した。以来、半世紀を超える長い歴史の中で、社会の変化とともに内容にも変更を加え、現在の形になってきた。

ブック・フェアは当初からIBBY(国際児童図書評議会)の協力を得て行われ、これが成功の一因ともなった。第二次世界大戦後に設立されたIBBYは児童書を通じた国際理解の推進を目的とした組織で、世界中の子どもたちが、様々な国で出版された本に触れ、海外の国を身近に感じることは、国際理解の第一歩となる。IBBYはすべての子どもたちに、優れた本にアクセスする機会を提供するための活動を展開しているが、質の高い児童書の出版と流通の促進を目指すブック・フェアの理念はIBBYの活動とも重なるものである。

イタリアにおける児童書や絵本の出版活動は、英国、米国、ドイツのような活発な国に比べれば「遅れている」状況だったが、逆にそれが新しいものの出現を促したともいえる。元々イタリアはデザインの領域で優れており、絵と文だけの世界に留まらない、「造形としての絵本」がイタリアから生まれた。

またボローニャでの開催ということにも成功の要因があると考えられる。ブック・フェアは世界中から集客があるが、ボローニャは交通の要衝でアクセスがよく、ブック・フェアの他にも様々な見本市が開催される。ポルティコで有名な市街は歩いて楽しいし、食の街では「おいしいものが食べられる」楽しみもある。

今ではボローニャは絵本の街として定着し、世界中から新しい才能が集まる。ボローニャには最高のものを求める意識と多様なものを吸収する柔軟性が共存している。二つは矛盾することなく、理念とビジネスの論理が適度に融合し、新しい絵本の世界が創造されたといえる。

2014年12月20日(土)

## 1. 17世紀ローマとボローニャ派の画家たち／小針 由紀隆(芸術文化学科)

絵画における「ボローニャ派」とは16世紀末から17世紀前半にかけてボローニャのカラッチ一族のアカデミアに学び、ローマにおいて神話画、宗教画、風景画、風俗画を精力的に制作した一群の画家たちをいう。「ボローニャ派」は17世紀初め、一つの地方流派を超えて、国際的名声を獲得した。

主な画家としては、バルトロメオ・パッサロッチェ、ルドヴィコ・カラッチ、アゴスティーノ・カラッチ、アンニーバレ・カラッチ、ガイド・レーニ、フランチェスコ・アルバーニ、ドメニキノ・ジョヴァンニ・ランフランコ、グエルチーノなどを挙げることができる。

アンニーバレ・カラッチ(1560~1609)、その兄のアゴスティーノ・カラッチ(1557~1602)、彼らの従兄のルドヴィコ・カラッチ(1555~1619)の3人が共同の工房で制作を始め、さらに1582年に「アカデミア・デリ・インカミナーティ」という私設の画学校を創設して、ここに集まった様々な画家たちによってボ

ローニャ派は形成された。この画学校は自然にもとづく学習を主唱し、反宗教改革時には禁止されていた裸体モデルを使った訓練もやっている。

カラッチー族の中で最も高い評価を得ているのは、アンニーバレ・カラッチで、彼は枢機卿オドアルド・ファルネーゼの支持を得てローマに招かれ、1600年にはファルネーゼ宮殿の天井画を完成させている。アンニーバレに対する評価は非常に高く、ベッローリは「学問研究の先端であるポローニャに極めて優れた才能の持ち主が現れて、墮落しほとんど絶えかけていた絵画芸術が生き返った。この才能の持ち主こそアンニーバレ・カラッチであった。」と評している。

アンニーバレの成功によってポローニャ派は国際的な名声を勝ち取り、レーニ、アルバーニ、ランフランコ、ドメニッキノらがローマに進出、教会や宮殿をフレスコ画で装飾していった。1621年にはポローニャ出身の教皇グレゴリウス15世が誕生し、ポローニャ派は益々繁栄の時代を迎えるが、一方でポローニャ派内部の対立、紛争も多く、ナポリ人の嫉妬などもあって、様々な問題が起きたことも事実である。ポローニャ派の画家についての評価も様々で、アンニーバレを非常に高く評価するベッローリに対して、マルヴァジーアはルドヴィコ・カラッチの方を評価し、ルドヴィコこそポローニャ派の中で最も才能に富み、かつ指導的立場にあった画家である、と述べている。

ポローニャ派の後世への遺産としては風景画への貢献が大きい。その評価は17世紀から19世紀まで安定的に高いものであったが、20世紀に入ると「古典主義」への評価は大きく落ちた。但し20世紀の最後の30年間には、ポローニャ派の画家に関する研究書が多く出版され、再評価が行われている。

## 2. 大学都市ポローニャの歴史と現在／武田 好（国際文化学科）

### ○ポローニャ大学

1999年、ヨーロッパの高等教育システム改革に関する「ポローニャ宣言」が発表された。これはヨーロッパにおける高等教育の質的な保証を実現すべく、大学組織、学位制度、単位制度などを共通化し、単位互換制度を設けるなど大学間の人的交流を通じて大学の国際化を進めようとするものである。一連の改革の過程を「ポローニャ・プロセス」という。

世界最古の大学とされるポローニャ大学は1988年に900年祭を行ったが、ポローニャ大学は各地からポローニャに集まってきた学生たちが自主的な相互扶助団体を作ったことに始まる。同朋人の集まりである国民団(natio)が次第に拡大し、大学の基となるユニヴェルシタス(universitas=大学団)という組織が、教師と契約を結び学ぶための契約法人団体となった。キャンパスはなく、講義は教師の自宅や教会で行われた。ポローニャ大学は13世紀の初頭に自然発生的に成立したが、法学校ができたのが1088年といわれている。ポローニャ大学は法学を中心に学生主導で成立した大学であるのに対し、パリ大学は神学が中心で、教師主導で成立した大学である。

中世ヨーロッパの大学では「自由七科」といわれる「三学(文法、修辞学、弁証術)」、「四科(算術、幾何、天文学、音楽)」が教授された。ここでいう「自由」とは自由人の自由、自由人が精神を豊かにするために学ぶべきもので、古代ギリシア以来の調和のとれた「知的教養」を指す。これらの多くは後に制度化され、大学の基礎教養となった。一方で「精神的教養」、人間の徳や器量に相当する人文主義的教養は中等教育の中で制度化された。今日、進められているポローニャ・プロセスの基礎にはヨーロッパ大陸伝統の知的教養と精神的教養が融合された教養があり、現在でも教養教育は大学の専門教育の中に組み込まれている。

### ○マキアヴェッリが生きた時代

『君主論』で有名なマキアヴェッリ(1469~1527)はフィレンツェ共和国の外交官で、共和国官僚の最高責任者であった。マキアヴェッリは『君主論』の中で、①国の分類とその征服、維持の手

段、②攻撃と防衛に関する軍事的側面、③君主の資質、④君主を待ち受ける運命論などを説き、自身が直接対峙したチェーザレ・ボルジア(1475~1507)を「理想の君主」としている。チェーザレは教皇アレクサンドル六世の実子で、教皇の命により教皇領内に軍を進めた。当時のイタリアは教皇領、ナポリ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノの五大国に分かれ、教皇領内は小領主が分立していたが、チェーザレ率いる討伐軍によってローマニャ(フィレンツェ共和国とヴェネツィア共和国の中間地帯)の諸都市が次々と占領された。チェーザレの最終目的は戦略的・地政学的に重要な拠点、交通の要衝であるポローニャの攻略にあった。だが、ポローニャの領主ジョヴァンニ・ベンティヴォリオは「チェーザレ」、「反チェーザレ連合」の双方と巧みな外交を展開し、チェーザレと和平を締結、ポローニャの支配権を守る。

マキアヴェッリは君主の資質として2つの要素「力量」と「運」を挙げた。その「力量=virtù(徳)」は、まさに中世以来の教養観念の系譜、すなわち精神的教養を指す。19世紀後半に国家統一を果たしたイタリアの歴史と文化は、多様性と創造性、生きるしたたかさ、といったキーワードで表現される。

## 3. ポローニャの文化と文化政策／高田 和文(芸術文化学科)

戦後のポローニャの歴史を概観すると、2000年直前まで共産党市政のもとで中央政府とは距離を置いた独自の政策が展開されてきた。ポローニャはもともと中小企業を基盤とする産業が発展してきたところで、1980年代後半に「第三のイタリア」として注目されるようになった。2000年に「欧州文化首都」となり、「ポローニャ2000」によって大規模な文化政策が推進されている。2006年にはUNESCOの創造都市ネットワークの音楽部門に加盟、2014年に浜松市と交流協定を締結している。

ポローニャは学生が数多く住み、彼らが前衛的な文化、芸術をリードしている。著名な劇作家、演出家のダリオ・フォアは商業演劇とは一線を画し、1960年代末に左翼的で過激な政治演劇を始めたが、その受け皿となったのはポローニャに作られた「ヌオーヴォ・シエーナ」(“新しい舞台”の意味)という劇団の活動である。また、ポローニャ大学には1970年代にDAMS(芸術音楽演劇学科)が設立され、記号論やアートマネジメント等の先端的研究と教育が行われている。ポローニャの街中にあるポルティコ(柱廊)の存在もユニークで、世界文化遺産への登録を目指して、保存と利活用に向けた広報活動も活発である。

ポローニャには重要な文化施設が数多く存在する。多くの博物館、美術館やフィルムライブラリーなどがあり、歌劇場、劇場も多い。図書館も主要なものだけで80、小さいものを入れれば200を数える。またイタリアの他の都市と同様、パカンスの期間に旅行者を迎えるフェスティバルも開かれる。

ポローニャの特徴は多くの博物館、美術館、図書館等を単体ではなくネットワークとして捉え、街全体として文化施設を運営しているところである。図書館で有名なのがサラボルサ図書館で、旧証券取引所を改装して2001年に開館した。視聴覚機器、マルチメディアを活用した先進的な施設で、開放的な構造と明るい雰囲気でも市民に開かれた場所となっている。中心市街地再開発計画の成功事例としても注目されている。

このほか、ポローニャ市立歌劇場はイタリアの主要なオペラ・音楽財団のひとつとして、日本をはじめ海外でも公演を実施している。コンサートホールや劇場も充実している。

ポローニャと浜松を比較すると、ポローニャは学生の数が多く、世界中から集まる学生が街の活性化に大きな役割を果たしている。市の総予算に占める文化予算の比率も浜松の0.67%に対して、ポローニャは1.9%と高い。共通点としては、中央の文化・大都市圏からの距離、ものづくりの伝統や安定した産業基盤、国際性、音楽都市、創造都市としての発展などが挙げられる。交流協定の締結を機に、浜松とポローニャは当面、音楽を中心とした様々な交流プログラムを展開していくものと思われる。

# SUAC×SPAC 近代能楽集『綾の鼓』の上演

高田和文 (副学長 文化・芸術研究センター長)

静岡文化芸術大学ではSPAC（静岡県舞台芸術センター）との連携事業により、2014年10月2日、本学講堂において三島由紀夫の近代能楽集『綾の鼓』（あやのつづみ）を上演しました。

本学とSPACとの協力はこれまでにもさまざまな形で行なわれてきましたが、今回は本学の学生がSPACにおいてインターンシップという形で本格的な演技指導を受け、劇団の俳優たちと一緒に舞台に立つという画期的な試みでした。もともとは本学芸術文化学科梅若猶彦教授の発案によるもので、新能プロジェクトチームの学生たちが運営をサポートし、俳優インターンシップには本学の演劇サークルの学生が参加しました。演技指導と作品の演出に当たったのは、SPAC芸術総監督の宮城聡氏です。

三島の近代能楽集は能の謡曲を現代劇に翻案したもので、『綾の鼓』のほか、『邯鄲』（かんとん）、『卒塔婆小町』（そとばこまち）、『葵上』（あおいのうえ）、『班女』（はんじょ）といった作品があります。日本でこれまで何度も上演されているばかりか、海外でもしばしば上演され、高い評価を受けています。私自身、ローマでイタリアの劇団による『葵上』と『班女』を見たことがあります。

『綾の鼓』のもとになったのは謡曲『綾鼓』（あやのつづみ）です。世阿弥が改作したとされていますが、もとの作者は不明です。同じく世阿弥作の『恋重荷』と並んで、老人の叶わぬ恋を扱った曲として知られています。

身分の卑しい老人が高貴な女性に恋をする、打つてもけっして音の出ない「綾の鼓」を渡され、老人は虚しくそれを打ち続ける、絶望した老人が池に身を投じて死ぬ、といった謡曲の骨格は、そのまま三島の作品に取り入れられています。ただし、時代は現代で、老人は弁護士事務所の小使い（岩吉）、相手の女性は向かいのビルの洋裁店を訪れる貴婦人（華子）という設定です。また、死んだ老人の亡霊が現れて女性と対話を交わすという点も同じです。鼓という古風な小道具を持ち出すために、洋裁店の客の1人を踊りの師匠にするなど、随所に工夫が見られます。

「老いらくの恋」という言葉がありますが、老人が若い女性に抱く恋愛感情というのは、実はかなり普遍的なテーマです。



イタリアのコンメディア・デッラルテ（仮面即興劇）にも、年がいもなく若い娘に手を出すパンタローネという人物がいます。現実には、高齢化が進む現代の日本でも老人の「性」がしばしば問題になります。そうした人間の業とも言うべきテーマを扱ったのが、能の『綾鼓』であり、三島の『綾の鼓』です。その意味で、たいへん現代的な作品とも言えます。

では、三島の作品は謡曲の舞台を現代に移し替えただけのものかということ、けっしてそうではありません。亡霊となった岩吉との対話の中で、上品な貴婦人に見えた華子が、実はかつて女すり師だったことが明かされます。しかも彼女は、岩吉の愛を試すかのように彼に鼓を打つよう命じます。岩吉は自分が書いたラブレターの数と同じ百回まで打ち続けますが、華子は聞こえないと言い張ります。そして、力尽きた岩吉の亡霊が消えた後、華子はぼつりと言います。「あたくしにもきこえたのに、あと一つ打ちさえすれば」。たいへん印象深い台詞であり、実に鮮やかな幕切れです。

謡曲では庭掃きの老人と女御の身分の差は明瞭ですが、三島の作品ではともに身分の低い男女どうしの恋ということになります。そのうえで、永遠に交わることのない男と女の情念を描いているわけです。岩吉と華子を隔てるものは、年齢や身分の差といった外的要因ではなく、人間の心の中の壁であると言ったらよいでしょうか。2人とも明らかに近代あるいは現代の人物像に見えます。亡霊となった岩吉が登場してからの2人のやり取りも、完璧な対話劇になっており、この点も能の様式と大きく異なっています。

さて、宮城氏はこの三島作品をどのように演出したのか。まず挙げねばならないのは、スピーカー（語り手）とムーバー（演じ手）を分離し、二人で一役を演じるという独特のスタイルです。これは宮城氏が長年追求してきた方法で、今回の演出でもそれを踏襲しています。さらにこの舞台の目立った特徴として、演じ手がそれぞれ仮面を着けたこと、また洋裁店の客たちを人形に演じさせたことが挙げられます。後者は観客の意表を突く視覚的効果を狙ったものと見えなくもありませんが、前者は明らかに能面を意識したうえでの演出と思われる。

三島の近代能はほとんどの場合、通常の現代劇として演じられています。イタリアでの翻訳上演も含めて、私がこれまでに見た舞台もそうでした。リアリズムの手法で演じられた場合、半世紀以上前に三島が書いた台詞は、現代の観客にとっていかにも古びた感じがするのは否めません。一方、宮城氏の演出は、しばしば文楽の手法にたとえられるように、日本の伝統演劇の要素を取り入れています。発声や台詞の抑揚もリアリズムの方法とは全く異なります。実際、宮城氏の今回の演出によって、三島の台詞が現代においてなお説得力を持っていることを改めて発見したように思います。

能という日本の伝統的な様式、そこから着想を得て近代の劇作品を作り上げた三島、そして近代を乗り越えて新たな演劇の方法を探求する宮城氏——このような流れで捉えると、今回の上演は日本の演劇の歴史を考えるうえでも大きな意味を持っているように思われます。



## 活動紹介

## 文化芸術セミナー「浜松 楽器の事典 ピアノ編」を開催

文化・芸術研究センター

文化・芸術研究センターでは、2014年度に文化芸術セミナー「浜松 楽器の事典 ピアノ編」を2014年6月から12月までの間、5回にわたり開催した。このセミナーは2011年度から3か年にわたり進められた「ピアノ製造アーカイブに関する研究」（研究担当者は地域連携室調査員・富田晋司）の成果還元の一環として企画されたもので、当地浜松が100年以上にわたり日本全国および世界に向けて製造を続けてきた「ピアノ」をテーマとして、「楽器の王者」ともいわれるピアノに関わる様々なトピックを紹介するセミナー「楽器トーク」とピアノのために作曲された古今の名曲を演奏する「名曲ライブラリー」とを組み合わせた「学んで聴ける」内容となっている。

各回150名近い聴講者が来場し、来場者アンケート等の結果からも好評を得られたものと考えられる。なお後半の「名曲ライブラリー」の演奏は、浜松出身、在住のピアニスト、石井園子さんがすべての曲を演奏した。（会場はすべて静岡文化芸術大学講堂）



結果からも好評を得られたものと考えられる。なお後半の「名曲ライブラリー」の演奏は、浜松出身、在住のピアニスト、石井園子さんがすべての曲を演奏した。（会場はすべて静岡文化芸術大学講堂）

## 第1章 「浜松のピアノ産業」(2014年6月6日)

明治の中期に始まった浜松の楽器作りの歴史を振り返り、浜松の楽器産業の創成と発展の歴史を紹介した。今日、浜松のピアノ作りはほぼ2大メーカーであるヤマハ、カワイによって担われているが、100年を超えるピアノ作りの歴史の中では様々な変遷があった。浜松で生まれた日本のピアノ作りは日本経済の発展、国民の生活水準の向上と共に一大産業へと発展し、やがて世界のピアノ市場を席巻していく。

産業史が専門の四方田准教授（文化政策学科）からは、「浜松に楽器産業が生まれたのは、「偶々、浜松滞在中の山葉寅楠による小学校のオルガン修理」という些細なきっかけによる偶然のことながら、楽器作りが始まった後は、多くの職人、技術者が集まりひとつの産業として発展、それがさらに別の産業を生み出すという産業発展のプロセスと産業集積が形成された」との解説がなされた。

後半の名曲ライブラリーでは、ピアノ音楽のルーツともいえるスカルラッティ、バッハといった18世紀初頭の作品や、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどよく知られる古典派の名曲が演奏された。

## 第2章 「ピアノを作るⅠ」(2014年7月11日)

前半の「楽器トーク」では、本学の峯教授（生産造形学科）から「ピアノを作るⅠ」として、ピアノという楽器についての基礎知識が講義された。ピアノが今日のような「88鍵」の形になったのは19世紀の終わりから20世紀の初頭にかけてのことで、18世紀の初めにピアノの原型がイタリアで発明されて以来、欧米各地でピアノ製造が発展し、鍵盤の数、音域の幅、弦やピアノアクションなど技術面で多くの改良が加えられてきた。ピアノの構造は精密で、アクション1鍵当たり約70点の部

品が使われており、88鍵分となればそれだけで6000点を超え、ピアノ全体では約8000点の部品からなる。木材は天然の場合、50～70%程度の水分を含んでいるが、天日干しや人工乾燥により10%以下まで水分量を下げたから材料として使用される。ピアノの製造工程は複雑で手作業も多く、自動車や電化製品の製造工程に比べれば、現在でもかなり職人的な工程である。

後半の「名曲ライブラリー」では「前期ロマン派」といわれるシューベルト、ショパン、シューマンなどの名作が演奏された。

## 第3章 「ピアノを作るⅡ」(2014年10月17日)

前回に引き続き、峯教授による「ピアノ作り」に関わるレクチャーが行われた。日本のピアノ作りの歴史を簡単に振り返った後、現在のピアノ工場の様子を工程の順を追って映像で紹介、工程ごとに解説が加えられた。ピアノ作りの映像から、ピアノが多くの工程を経て、また各工程内での様々な手作業により作り出される「工芸品」であることがわかる。また多くの場合は黒一色でお馴染みのピアノの「デザイン」について、海外の事例も含めた斬新なデザインのピアノが紹介された。

後半の名曲ライブラリーでは「後期ロマン派」といわれるリスト、ブラームス、チャイコフスキーなどの作品が披露された。

## 第4章 「ピアノ調律と調律師」(2014年11月14日)

「楽器トーク」では、調律師の杉森重夫氏（ヤマハミュージッククリエティング所属）をゲストコメンテーターとして招聘し、ピアノ調律に関わる様々なお話をして頂いた。ピアノの基本構造や、発音、響音の仕組みなどが説明された後、調律の原理（平均律と純正律の違い等）や調律師が現場で具体的にどのような作業（調律、整調、整音）をしているのか、など日頃あまり目にしない、また一般の人には馴染みのない「調律の世界」を紹介した。

名曲ライブラリーでは近代フランスの大作曲家、フォーレ、ドビュッシー、ラベルなどの作品が演奏された。

## 第5章 「楽器産業と創造都市」(2014年12月17日)

シリーズ最後となる第5章では、本学の根本教授（文化政策学科）から浜松における楽器産業の発展と世界の楽器工房の紹介、浜松の楽器工房研究の報告等の後、ユネスコの創造都市ネットワーク音楽部門への加盟の話題を絡め、今後の浜松における楽器産業、電子鍵盤楽器を含めた未来の楽器作りと世界の楽器産業をリードする浜松の創造都市としての可能性などの話題が提供された。

名曲ライブラリーは近現代ロシアの作曲家、スクリャービン、ラフマニノフ、プロコフィエフ、および日本の作曲家、滝廉太郎、佐藤敏直、坂本龍一などの作品が演奏された。



# 活動紹介

## ○研究成果発表会を開催



平成26年12月4日、「平成26年度 静岡文化芸術大学 研究成果発表会」が開催されました。この発表会は本学で行われている様々な研究活動について、研究成果の公開、地域への還元を目的に、今回初めて開催されたものです。発表会では、本学の「重点目標研究領域」となっている3本の研究テーマ（「多文化共生を含む地域社会発展に向けての文化政策」、「アートマネジメント」、「ユニバーサルデザイン」）と平成25年度に「学長特別研究」に採択された5本、及び「文化・芸術研究センター長特別研究」に採択された1本の計9本の研究テーマについて、それぞれの研究担当者から発表が行われました。

発表会の開催に合わせて各研究の目的・概要、研究成果、今後の研究成果の還元方法などをまとめた資料集を作成、当日の来場者に配布されましたが、これらの内容は今後、大学のホームページでも公開され、本学の研究活動をわかりやすく広報していく予定です。

当日の発表内容の詳細は下記の通りです。尚、No.10とNo.11の研究テーマについては今回の発表会ではなく、12月17日開催の文化芸術セミナー「浜松 楽器の事典 ピアノ編」の「第5章 楽器産業と創造都市」（於：本学講堂）の中で、公開報告が行われました。



No.	研究区分	研究テーマ	発表者	所属等
1	重点目標研究領域 (多文化共生)	多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究	池上 重弘	国際文化学科
2	重点目標研究領域 (アートマネジメント)	我が国の芸術団体・文化施設等の経営状況に関する基礎的研究	片山 泰輔	芸術文化学科
3	重点目標研究領域 (ユニバーサルデザイン)	本学のユニバーサルデザインの推進に関する研究	古瀬 敏	名誉教授
4	学長特別研究	大学における地域貢献と活動拠点のあり方研究	下澤 嶽	国際文化学科
5	学長特別研究	グローバル時代における日本文化発信力強化研究	梅若 猶彦	芸術文化学科
6	学長特別研究	文化芸術による地域資源発信事業の研究	磯村 克郎	生産造形学科
7	学長特別研究	浜松の民芸運動の現代的評価に向けて	黒田 宏治	生産造形学科
8	学長特別研究	SUACにおけるBCP策定の為の基礎的研究	中野 民雄	空間造形学科
9	文化・芸術研究センター長特別研究	発達障害のためのデジタル教科書のデザイン	宮田 圭介	メディア造形学科
10	学長特別研究	ピアノ工房『大橋ピアノ研究所』アーカイブ作成のための調査研究	根本 敏行	文化政策学科
11	文化・芸術研究センター長特別研究	ピアノ製造アーカイブに関する研究	富田 晋司	地域連携室

## 編集後記

2000年4月に開学した本学は、2015年3月で満15年、11世紀創立のポローニャ大学に比べれば如何にも短い歴史ですが、それでも「15年前」は人間の感覚でいうと“少し昔のこと”のようにも感じます。たとえば2000年当時、写真はまだ「フィルム式」が主流で、開学初期の頃の画像、映像はほとんどデジタル形式では残っていないようです。フィルムカメラとデジタルカメラの売上が逆転したのは2005年、フィルム式の時代は画像や映像を素人が処理するのは簡単なことではありませんでした。文化・芸術研究センターの今後の役割として、学内外の様々な動きを記録し、整理し、保管し、継承し、伝えていくことが益々重要になるでしょう。デジタル技術の進歩によって、それを手軽に実現できる時代になりましたが、「学府の歴史を後世に残す価値」をポローニャ大学から教えられる思いです。(St.)

H r t & C u l t u r e



文化・芸術研究センター  
ニュースレター

Vol.21

発行人：高田和文 編集人：富田晋司  
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター  
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)

